



南相馬の皆さまへ心を込めて・・・「油菜ちゃん」を届けたい

3月19日、「南相馬市社会福祉法人連絡会」にご協力をいただき、南相馬市内にお住まいのひとり親・障がい者・高齢者などの約50世帯に、「油菜ちゃん」をお届けしました。

福島県には、原発事故のあと避難のため家族が離れ離れとなり、その後離婚をしてひとり親となったご家庭や、子ども家族と離れて暮らさざるをえなくなった高齢者など、孤立したり不安定な生活を強いられている方々がたくさんいらっしゃいます。その方たちの生活は、昨年からの新型コロナウイルスにより、さらに厳しさを増しています。

私たちはこの10年、放射線量の測定と農地再生の取り組みによって、南相馬の地に関わってきました。しかし、社会的弱者といわれる方々との関わりはほとんどありませんでした。この状況で、なにか私たちにできることはないのか…と考えていたところ、「南相馬市社会福祉法人」の活動を知りました。8つの社会福祉法人の連携で、子ども食堂を運営されていましたが、コロナのため今は休止、子ども食堂に代わり、月に一度お弁当を一軒一軒配る活動をされています。そこで、お弁当と一緒に「油菜ちゃん」を届けてもらえないか…とお願いしたところ、快諾していただきました。

「放射能に汚染されていない粉ミルクをウクライナに届ける」…そこからスタートした私たちにとっては、原点に戻るような思いです。農地再生を目指して取り組んできた、菜の花プロジェクトの結晶「油菜ちゃん」が、南相馬で育っていく子ども達と地域再生の担い手の皆さんとの架け橋になり、地域に浸透していくことを願う気持ちも込めています。この取り組みは、今後も継続していく予定です。ポレーシェ読者の皆様にもご理解をいただけるよう努めていきます。

(市原)



＜みんなの食堂「ゆるっと」(南相馬市の子ども食堂)ご利用の方(3月19日)＞

〒460-0012 名古屋市中区千代田5丁目11-33 STプラザ鶴舞 本館5階B

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行名：三菱UFJ銀行 高畑支店(店番号297)

口座番号：普通 1682863

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 池田 光司

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-228-6813 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

* 5年前に電話番号が変わっています。お間違いがないよう もう一度ご確認ください。

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>



今回、南相馬のみなさまに「油菜ちゃん」をお届けするにあたり、メッセージカードも添えました。

南相馬で生産していること、農地再生協のこと、チェル救のことをお伝えするよい機会となりました。

「南相馬市社会福祉協議会」様のご配慮に、心より感謝いたします。

MOTTO油菜ちゃん

今回は「油菜ちゃん」が、いかに特別な油かというお話ですよ。

♪ 油菜ちゃん DO 科学 DO 健康UP

サラダ油＝菜種油、キャノーラ油＝菜種油と誤解している方、少なくないのでは？

それはどちらも不正確です。サラダ油は、菜種油のほか、大豆やトウモロコシ・ひまわり・ゴマなど、いろいろな植物油が原料です。キャノーラ油は、ほとんどがカナダ・アメリカ・オーストラリアなどの遺伝子組換えの菜の花から作り出された油です。

日本では遺伝子組換えの菜の花は栽培できないので、国産のナタネはキャノーラとは違い、非遺伝子組み換えで安全です。それなのに、「菜種油にはエルカ酸という心臓病を引き起こす成分が含まれている」という理由で、避けられてしまっているのです。

確かに、古い品種のナタネは、エルカ酸が含まれていました。しかし、日本ではエルカ酸を含まないナタネが開発されました。エルカ酸を含まない品種は4つあり、そのうちの「キザキノナタネ」「キラリボシ」というナタネを使って、「油菜ちゃん」を作っています。

ちなみに、世界で最初にエルカ酸を含まないナタネ油を開発したカナダの「キャノーラ」は、それを「売り」にして世界的に販路を広げました。今、スーパーで売られているキャノーラ油は、98%が遺伝子組換えです。

菜種油に限らず、日本の食用油の原料は、9割以上がカナダ・オーストラリア等の外国産。しかも遺伝子組換え品種がほとんどです。非遺伝子組換えの国産ナタネから作られた「油菜ちゃん」は、とても貴重な油なんです。

《油菜ちゃんのご注文・お問い合わせ先》

- チェルノブイリ救援・中部事務局 TEL/FAX 052-228-6813 Email chqchubu@muc.biglobe.ne.jp
- 南相馬農地再生協議会事務所 TEL/FAX 0244-23-5611 Email minamisoma.nouchisaisei@gmail.com

3.11から10年目の菜の花花見会

～菜の花プレサミット IN 南相馬 2021年～

2021年4月24日(土)10時～15時30分

第一部 場所: 萱浜園場(南相馬市原町区萱浜字北オノ上82)

※黄色い旗を目印にお越しください。10時より開会式を行います
9時50分までに集合してください。

満開の菜の花が皆様をお迎えします。萱浜園場は例年GWの期間中には『菜の花迷路』として市民の皆様にお越し頂いております。

～～～昼食 (ナタネ油『油菜ちゃん』お使ったお弁当をご用意)～～～

第二部 場所: 小高区浮舟文化会館(南相馬市小高区本町2-89-1)

- ・10年間の南相馬農地再生協議会の歩み、地域の皆様の取り組み
- ・10年前のあの日、あの時の経験談を(前南相馬市長: 桜井勝延様)
- ・住民の『命』と関わったこの10年(小高区同慶寺住職: 田中徳雲師)

田中徳雲師のプロフィール

同師は南相馬市小高区同慶寺住職であり東日本大震災以降『命』をキーワードとして地域住民の精神面に向き合う活動に尽力されました。2019年11月のローマ教皇来日の際には福島県の被災者の代表として、ご説明されました。

お問い合わせ

南相馬農地再生協議

お申し込み

TEL 0244-23-5611

minamisoma.nouchisaisei@gmail.com

参加費 ￥2,000-

主催 社)南相馬農地再生協議会

共催 NPO法人 菜の花プロジェクトネットワーク

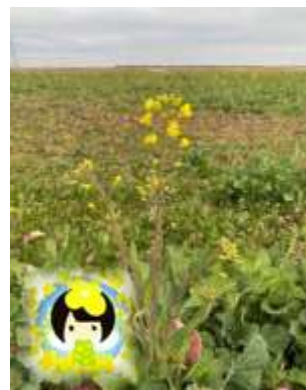
こんにちは！ 南相馬農地再生協議会事務局の池田です。

コロナに負けてなるものか！と、大きく成長を始めている菜の花たち。4月24日(土)は恒例のお花見会です。

油菜ちゃんはどこかなあ？ぜひ南相馬の菜の花を見に来てくださいね♪

10:00 1部 花見会(萱浜園場)
11:30～12:30 昼食
13:00 第2部 交流会
(浮舟文化会館)
15:30 閉会

<2021年春 一番乗りの菜の花
(撮影 2021.03/20)>



第3回 「油菜のさと 環境フォーラム」 報告

(原 富男)

3月21日に、福島県南相馬市で「油菜のさと 環境フォーラム」が開催されました。この催しは、南相馬市で取り組んでいる、菜種栽培とバイオガスを中心としたクリーンエネルギーと資源循環の拠点作りの準備の一つです。今回は、地元南相馬市のほか、遠方からも参加がありました。開催直前に、市の職員にコロナ感染者が出たとのことで、予定していた市施設の利用ができなくなり、急遽、近くの集落センターでの開催となりました。

第一部は講演会、第二部は実験用バイオガスミニプラントの見学会でした。

講演は、「里山資本主義による地域作りの20年」と題して、日本工業大学名誉教授、佐藤茂夫さんが関わった実践報告でした。

埼玉県宮代町は2002年から、「畑の発電所」と称して、ソーラーパネルとメタン発酵装置による発電施設を作り、「ふるさと祭り&産業祭」や「竹アート展&ライブ」などの、地域イベントを行ってきました。この施設は、小さな合掌作りの竹小屋です。邪魔物とされてきた竹を材料としてみんなで小屋を建て、屋根にはソーラーパネル、内部にはミニバイオガス発酵装置を作って発電し、イベントに利用しています。竹炭作りやBDF（バイオディーゼル燃料）づくりも行われています。またソーラーパネルは、市販品を購入したのではなく、学生たちがハンダ付けしてセルを自作したとの事で、良い取り組みだと思いました。

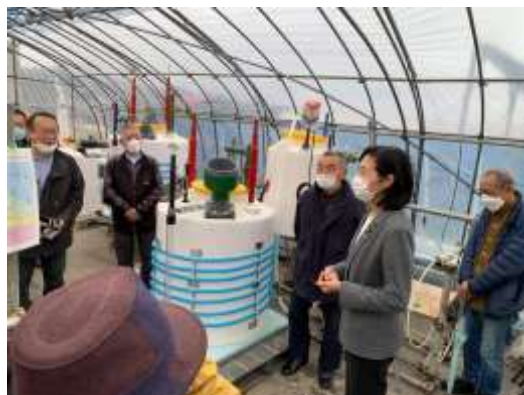
宮代町では、「子ども環境会議」という子どもの学習機会があり、子どもたちと地域の若者・大人が連携し、「宮代エコスターズ」として交流しているとのことです。地元の農産物を使った料理教室も行われています。また、子どものチョコレート作りでは、「カ

カオを栽培している人たちは、チョコレートを食べたことがない」ことなども学んでいるそうです。宮代町の福祉作業所「ひまわりの家」では、廃食油を回収してBDFを作り、車の燃料としていることも報告されました。

震災後は、これらの経験を基に、福島県相馬市霊山町で活動を開始し、霊山プロジェクトの方々と、竹炭を利用した水田除染や、特産の「あんぽ柿」や、生ゴミを原料とした「バイオガスプラント作り」に取り組み、バイオガスの農業用ビニールハウスでの加温利用、バイオガスの原料の一つであるデントコーンやモロコシの栽培、さらにこれを発展させ、モロコシクッキー・青トマトピクルス・ナツハゼのジャム・ケーキなどの試作も行われているそうです。

バイオガスを中心に、竹など地域産品の利用、液肥利用、多彩な地域特産食品の開発など、これからの地域作りの見本ともいえる良い講演会でした。

私はこれまで10トンクラスの発酵槽を作ってきました。佐藤さんはそれよりも小型のバイオガス装置を作ってきました。初対面でしたが、お互いにバイオガス装置を実際に作ってきた者同士の連帯感があり、今後も交流協力をしたいと思いました。



＜第2部の実験用ミニプラントの見学会＞

——— 「菜の花プロジェクト」のこれから ———

3月11日、東日本大震災から10年が経った。世界の原子力の流れを変えた福島第一原発事故は、未だに収束の目途も立たず、廃炉の見通しはますます遠のいている。今年はチェルノブイリ原発事故から35年。こちら石棺を覆う巨大なドームの中で、やっと石棺の解体が始まったばかりだ。チェルノブイリ事故の被災地を歴訪しその現実を描いた、ベラルーシの作家スベトラナ・アレクシエーヴィチの言葉が今、改めて心に響く。「原発事故の原因は、技術的失敗ではない。便利主義・経済優先主義が真の原因だ。これを見直さなければ、事故は再び起きる」。2003年10月に、彼女が名古屋の講演会で語った言葉だ。10年前それが現実となった。

被災地の今

原発の地元は、立地町の大熊町・双葉町は勿論、未だ放射能汚染レベルが高い浪江町も立ち入り禁止区域が多く、住民の帰還は殆ど進んでいない。一方、チェルノブイリ救援・中部がこの間支援してきた南相馬市は、事故前の人口は約7万人だったが、事故直後は1万人に減少、現在は5.2万人までの回復になっている。私たちは、事故直後の2011年6月から、南相馬市を中心に放射能の空間線量率を測定し、毎年2回汚染マップを作成してきた。その結果によれば、南相馬市の空間線量率は大幅に低下し、年間追加線量1mSv未満の面積が、事故直後は5%以下だったが、昨年5月は92%にまで回復している。その原因は色々ある。半減期が2年のCs134の減衰の影響に加え、放射能が雨で地下に浸透した事、除染がほぼ完了した事などが挙げられる。農作物の汚染も事故直後は高かったが、現在、栽培作物の多くは検出限界以下に戻っている。但し、野生のキノコや山菜・川魚などは、依然として汚染が高く、今後も回復の見通しは立たない。このように、外部被曝と内部被曝のリスクは低下したと言えるが、場所によって土壤汚染は依然として高く注意が必要である。

菜の花プロジェクトの今

南相馬では、2013年に有機農家の杉内さんが初めてナタネを栽培して以来、その面積は年々広がり、現在は75haにまでなっている。読者の皆さんもご承知の通り、菜種油

「油菜ちゃん」は商品化されて久しいが、この間のコロナ騒動も絡んで販売量が落ち込み、経営は厳しい状況にある。他方で、昨年暮れから南相馬市が学校給食で「油菜ちゃん」を採用してくれて、明るい兆しも見えている。「土壤汚染はあっても、植物油は汚染しない」という、チェルノブイリ事故被災地での発見は、依然として汚染地域の希望の光である。

「油菜ちゃんの夢」を希望に

この10年間は、汚染しないナタネ油「油菜ちゃん」の製造販売に精いっぱいだったが、これからは「菜の花プロジェクト」本来の目標である「油菜のさと」構想の実現に向けて、活動を活発化させよう。汚染地で、汚染のないナタネ油を作り、汚染した油粕でバイオエネルギーを作る。バイオガスは、熱源や発電のエネルギー源として、今後大きく期待できる。バイオガスは、ドイツでは既に原発を超えるエネルギー源であり、雇用者数も原発を凌ぐ。ナタネ栽培でゆっくり除染しながら、ナタネ油で様々な加工品を作り、熱源として温室栽培や加工施設のエネルギー自給を目指す、これが「油菜ちゃんの夢」だった。

これからは「夢を実現可能な希望」として、具体化に向けた活動を始めよう。「油菜のさと」は、単なる被災地復興ではなく、未来の社会システムのモデルとなる事を目指すのだ。それこそが、真の脱原発・脱炭素社会の実現である。

(2021年3月25日 河田)

福島事故後 10 年に寄せて

☆ こんにちは[ウクライナ語で]、こんにちは[ロシア語で]、コンニチハ[日本語で]

『ドンチェヴァ・イエフゲーニャ』です。



ここはウクライナのジトームル市、「チェルノブイリの人質たち」の事務所です。

2021 年、この年に二つの悲しい日付が重なりました。1986 年に起きた「チェルノブイリ原発事故の 35 周年」、そして 2011 年 3 月 11 日の「福島第一原発事故の 10 周年」です。

私たちの基金の活動は、1986 年 4 月 26 日に起きた事故で被災した地域・・・放射性物質によって汚染された地域の人々への支援です。そして、とても嬉しいこととして申し上げたいのは、1991 年、私たちのウクライナが、若い独立国家となった時、最初に支援の手を差し伸べてくれたのは、日本の友人の方々です。日本の母親や父親の団体、あの恐ろしい原発での事故で被災した人たちを支援したいと思ったの方々です。それは、粉ミルクの支援であり、医療施設への支援であり、事故処理作業、消防士への支援、恐ろしい原発での火災との闘いに最初に入っていた人たちへの支援です。私たちは思ってもみませんでした・・・2011 年、同様の悲劇が日本国民に起ころうとは。事故後初めて日本を訪れた時、その悲劇は本当に恐ろしいものだったと分かりました。津波の被害を受けた広大な領域は、そこを訪れたすべてのウクライナ人に、恐ろしい印象を残しました。私たちは、日本の友人たちを励まそうと努力しました。事故の後でも生きていくことはできる、ウクライナの私たちも生きており、子どもも生まれている・・・と。そして数年後、私が改めて日本を訪れた時、私はその間に生じた巨大な変化

を目の当たりにしました。

私は確信を持って、皆さんがこの悲劇に立ち向かうことのできる国民だと言います。皆さんは団結して、すべての困難を克服できる強い力になることができたのです。もちろん、皆さんの前途にはまだ多くの仕事待ち受けています。汚染された土地で、多くのことがなされなければなりません。でも、皆さんが発揮した努力は、真の勇気と闘いの証です。ですから、皆さんのウクライナの友人全員に代わって、この間に皆さんのことが好きになったすべての者たちに代わって、私は言いたいと思います。人生は続いて行くということ。この困難な災厄の中で、私たちは頑張り抜けるということ。そして、すべての困難にもかかわらず、私たち両国の国民は、いつも共にあり続けるということ。

喜びの時にも、困難な時にも。ご清聴ありがとうございます、ごきげんよう。

☆ 私は『ボリス・チュマク』、元ウクライナ国ジトームル州消防局局长です。そして 35 年間、「チェルノブイリの消防士たち」基金の代表を務めています。3



月 11 日に向けて、追悼のご挨拶を申し上げます。10 年前のこの日、惨事が起こりました。惨事というより、不幸が日本を襲ったのです。その中で、福島原発も破壊されました…。人類は皆、お互いに繋がっています。災害は自然に由来するものもあり、人災も加わってしまうことがあります。地震、津波、そしてフクシマ・・・日本国民は、かつてヒロシマとナガサキの原爆投下を受けました。そして今も、私たちの最良の友人であり続けています。彼ら自身も、その苦難を体験してきたからです。そこにフクシマが加わり、私たちは血を分けた兄弟のようになりました。私が日本国民の方々に感謝しているのは、福島事故の事後処理をしなければならなかった困難な時期にも、

私たちにできるだけの支援をしてくださいました。そして今でも支援をしてくださっています。

消防局全体が、感謝を...事故処理作業者だけではなくありません。私たち事故処理作業者は、この不幸のすべて...それとイかに闘うかを知っています。ですから、消防局全体が、日本国民の皆さんに心から感謝申し上げます。私は、長く生きて多くの体験をしてきました。でもこんな...こんな国、こんな国民に出会ったのは初めてです。日本の方たちは、この問題に、人間として関わってくれています。彼らは、私たち皆を支援してくれています。彼らに対する感謝の気持ちは、言葉では言い尽くせません。私たちも支援をしました。日本で原発の事故があった時、私たちはすぐに手紙を書きました。日本の友人たちに、「どんな支援ができますか？」「私たち事故処理作業者が...、力も健康も不足しているというなら、助言が何かで...。」それに応えて届いた依頼は、次のようなものでした。「放射線検知器の入手にご助力いただきたい。」私たちはその依頼に応えました。日本の友人の皆さんにご挨拶します。お会いしましょう、ここジョーミル州で待っています。ただ単に友人として、支援など抜きで。ただお会いしたいんです。事故処理作業者たちが、いい兄弟として。私はもう「きょうだい」と言います、ただの友人じゃない。彼らは「きょうだい」のように行動してくれたんです。

☆ 私は「**タヴァンスキー・オレーク**」、1986年



それから原発そのものに行きました。4号炉の下に大きな壕（サプレッション・プール）があり、そこにコンクリートを流し込んで固めるための水を供給する作業です。10人の班で、私は最年長でした。困難な

にはこの消防局で勤務していました、現在は年金生活者です。1986年、出勤命令を受けてチェルノブイリに、

作業でしたが、誰もけがはしませんでした。皆、被曝をしたわけです。そして私には、「名誉勲章」が与えられました。

今はもう年金生活ですが、その時の被曝による影響が、健康状態に表れています。

皆さんへの言葉として...そちらはいつも地震に見舞われていますね。福島ではまた最近、震度7の地震がありました。かなりの地震です。

ご多幸をお祈りしたいです。すべてがうまくいきますよう...放射線に気をつけてください。ご健康とご成功、ご多幸に恵まれ...そして地震が減りますように。

☆ こんにちは、「**ユーリイ・クシネルチュク**」



です。私は、非常事態局オヴルチ地区支部の支部長です。チェルノブイリ原発事故の後、オヴルチ地区のかなり

の部分が、放射性物質によって汚染されました。そのため、私たちは常時そのような地域で仕事をしなければなりません。特に、昨年(2020年)春に大きな森林火災が起き、非常事態にまで拡大しました。火災の大部分は、無条件移住区域と任意移住区域で起きました。私たちは、日本のお友だちのご支援に大変感謝しています。提供された放射線検知器は、この火災に使用し、噴霧器にも大変感謝しています。COVID-19のパンデミックに際して、建物の消毒に用いられました。そして、上空からのモニタリングができ、火災の火元を初期の段階で発見できる、クワッドローター（ドローン）にも感謝しています。私たちオヴルチ地区の住人、とりわけ消防・レスキュー隊員は、福島の皆さんに呼びかけ、励ましの言葉をお伝えしたいと思います。どうぞお元気で、勇気を持ってください。私たちは、あの恐ろしい福島第一原発事故だけでなく、最近発生し、またも被害を及ぼした地震のことも知っています。

私たちは皆さんと共にあります。皆さんの暮らしがすべてうまくいきますように。



★ クリスマスカード

ウクライナに向け船便で送った 1,086 枚のカードは、無事 2 月 15 日ウクライナへ届いた。その週に、学校、病院などへ届けるとのホステージ基金からのメール。その後、3 月に入って、ホ基金のドンチェヴァさんから「私はクリスマスカードを学校に届けています。すでに多くの学校から、カード配布の写真が送られてきました。私はそれらをフェイスブッ

クのホ基金のアカウントにアップしています。」との連絡があった。日本からなかなか届かないカードを、半ばあきらめていた様子の子も達は、「思いがけない」プレゼントを受取り、とても喜んだとの事。一緒に送った縫いぐるみは幼稚園の子も達に、また千羽鶴は成人病院チェルノブイリセクションに渡し、あとはオウルチとナロジチの地区病院の小児科の子も達にプレゼントされた。

★ ミルク支援

1 月 27 日に、チェル救からミルク代 3,248 ドルを国際送金。3 月初めには、すべての病院が粉ミルクを受け取った。配分は、州立小児病院 30%、市立小児病院 20%、州立孤児院 20%、ナロジチ地区病院 5%、オウルチ地区病院 15%、コロステン地区病院 10%。

(ナロジチが 5%なのは、同地区の女性は皆オウルチでお産をすることになっており、ミルクの需要はオウルチが多いから。) ホ基金は、粉ミルクを提供される患児とその病気についての情報を送ってくれるよう各病院に依頼し、そのデータを日本へ送ってきた。そこには、病院名・支援額・粉ミルクの名称・患者の診断名、そして、患児のたくさんの病名が記載されている。



★ 事故処理作業支援

事故処理作業への医薬品支援として申請した庭野平和財団助成 96 万円が、年末に通ったことに関して、ホステージ基金は被災者（事故処理作業）各基金の代表たちと合同の会議を開き、庭野平和基金の支援について彼らに通知した。そして、医薬品の受け取りは、かつて行っていたようにすることで意見が一致。つまり、事故処理作業者は医師から処方箋をもらい、その処方箋をメディサン社の薬局に渡して、薬品をインボイスに従って受け取り、インボイスにサインをする。その後、私は皆さんにインボイスを送る・・・と。お金の配分は各基金のメンバー数に従って行う。

★ ウクライナの新型コロナウイルス情報

1 月 15 日の情報では、一日当たりの感染者数が 8,000 人弱で、ピークは過ぎたかのようだとのメールが届き、1 月 25 日の情報では、学校の生徒たちは教室に戻り、全ての防疫措置は解除された・・・とメールにあったが、3 月 8 日、ジトーミル州はまた、防疫体制の一番厳しいゾーンに区分され、飲食店は閉鎖され、テイクアウトのみとなり、食料品店と学校のみが開いていると伝えてきた。

福島を忘れない！ 3.7上伊那アクション 報告

(原 富男)

東日本大震災から 10 年を迎える 3 月 7 日、伊那市で「福島を忘れない！ 上伊那アクション（実行委員会主催）」が行われました。午後 1 時から集会、午後 2 時半から講演会を開催しました。

集会には 130 名が参加し、主催者挨拶のあとリレートークが行われました。

発言は被災者・避難者・福島で暮らす人々への連帯、今なお再稼働を進め補償を打ち切る政府への批判、汚染水や放射性廃棄物の問題、再生可能エネルギーによる持続可能な社会への転換への決意など多彩でした。

講演に先立ち、数日前にウクライナから送られてきた、チェルノブイリ原発事故の被災者であるジトミル市の事故処理作業員（消防関係）からの「10 周年に向けたビデオメッセージ」が紹介されました。

講演会は、講師に河田昌東さんをお招きし、福島原発事故から 10 年の現状について話していただきました。なかでも「(福一の) 2 号炉が奇跡的に爆発を免れ、あわや 250 キロ圏内が大惨事になる寸前だったこと」「今年 2 月の地震後、冷却水の水位が下り、水漏れが発生していること」「これを補うには倍の水の注入が必要とされ、これが倍の汚染水を作り出していること」などが話されました。

また、南相馬市でチェルノブイリ救援・中部も参加している「菜の花プロジェクト」の現状報告も行われました。講演会には 54 名の方が参加されました。

講演会の内容は、コロナ禍でもあり、参加できなかった方向けに、YouTube にもアップされました。実行委員会の総括会議でも、講演会は好評でした。私自身忙しく準備不足でしたが、続けることの大切さを再認識しました。参加者の皆さんに感謝します。



クリスマスカードキャンペーンにご協力いただいた皆さまへ **ご協力ありがとうございました！！**

(ボランティア 斉藤)

コロナ禍のなかでの今季のクリスマスカードキャンペーン。「みんなでいっしょにカードが作れなくて・・・」「(ウクライナ側が) 航空便を受け付けない・・・」「集まるのか？無事届けることができるのか？」終始、ドキドキ。福島へは例年通り、クリスマスシーズンに届けることができたものの、11月下旬に船便で送ったカード類が、ウクライナに到着したのは今年2月15日。皆さまに作っていただいたカードやプレゼント、少し遅めになってしまいましたが、それでもなんとか子ども達の手が届けることができました。改めて、キャンペーンにご協力いただきました皆さまに、感謝いたします。

集まったカードの総数は約2,500枚。ぬいぐるみやペーパークラフト数百点、たくさんの折り紙などのプレゼントも、カードと一緒に贈らせていただきました。

ウクライナでプレゼントを受けとっている子ども達の写真を、下に掲載いたしました。カードを嬉しそうに受け取る子ども達の笑顔、ぬいぐるみを抱いた子ども達の姿を見てみると、こちらも笑みがこぼれてきます。

当団体は、クリスマスカードキャンペーンを、被災者の方々と私たちの心をつなぐ大切な取り組みとして、今後も続けていく予定です。来年度(30回め)のキャンペーンに向けて、また、カードや折り紙を作り始めていただくとありがたく存じます。

ぜひ、ご友人にもお声かけください。どうぞよろしくお願いいたします。



東日本大震災犠牲者追悼式 @ 名古屋市鶴舞公園／東別院(名古屋市)

主催：東日本大震災犠牲者追悼式 あいち・なごや実行委員会 レスキューストックヤード他 13 団体

昨年は、新型コロナウイルスの感染拡大のため、式典会場での追悼式は行えませんでした。今年、感染予防対策を徹底しながら、3/11(木)、昼間の部が鶴舞公園・普選記念壇、夕方の部が東別院で行われました。大震災から 10 年目の今年、穏やかな天候に恵まれ、それぞれの会場に約 500 名、計約 1,000 名の参列者がありました（主催者による）。

会場入り口で検温と手指消毒を行いながら記帳を済ませ、ステージの階段のキャンドルが揺らめき、参列者が順次献花と祈りを捧げました。発災時刻の 14 時 46 分には東北方面に向かって黙とうし、また犠牲者への宣言文が読み上げられました。献花の時には、ゴスペルグループの鎮魂歌が静かに流れました。

コロナ禍のためか人は少なめでしたが、岩手・宮城・福島県、関東からの避難者の方々が参列されました。マスコミのインタビューに「自分たちが伝えていかなければ」と、10 年の愛知県での避難生活や避難元の復興等について、ご自分の体験を通して答えていらっしゃる姿が印象的でした。

（戸村京子）



追悼式典会場
（上：鶴舞公園、下：東別院）



「福島を忘れない！ 被災地に寄りそって 10 年」

…設立から 30 年「NPO 法人チェルノブイリ救援・中部」の活動…

* 戦争と平和の資料館「ピースあいち(名古屋市名東区よもぎ台 2)」で企画展開催(3/2～4/3)

会場では、チェルノブイリ原発事故のきっかけから、福島支援につながった経緯が紹介されています。チェルノブイリ原発事故後、私達は放射能に汚染していない粉ミルクの支援、被災者の健康を守るための医療支援、被災者を励ますためのクリスマスカード支援…など、数多くの支援を続けてきました。そして、そこから得た経験やノウハウを生かして、福島の支援につなげてきました。外部被曝と内部被曝を防ぐために、目に見えない放射能を「見える化」すること、農地再生・農業復興のために「菜の花プロジェクト」にチャレンジすることなど…。「油菜ちゃん」は、ウクライナと南相馬を繋ぐ架け橋になるかも知れません。

2011 年から年 2 回の空間線量測定を行って作成した、放射線量率マップを見ると、空間線量が減少していくようすが一目で分かります。

今回展示された資料は、「ピースあいち」様のご厚意で、チェルノブイリに譲っていただきました。他のイベントでも、皆様にご紹介したいと思います。

（美）



事務局便り

10年目の測定プロジェクトを4月に控え、その準備に追われている。福島県外の方々は、早くから測定隊参加のお申し込みをいただき、定員に達した。しかし、問題は地元のご協力者をいかに確保するか…であった。つい最近まで、10名にも満たない状況で、途方に暮れていた。寝ても覚めても、測定隊、測定隊…。心労ここに極まれり！！…とか言う場合ではない。電話電話。すると待ちわびていたメールが入り、「前半後半、大丈夫！」と。ひとつがほどけると少しずつめどがたってきた。電話の向こうから、「他のところの知り合いに声かけてみますよ。」「どこでもいつでも大丈夫！」とか。事務局の兼松さんも「なんでもしますから言ってください！」と。ありがたい。さあ、あと一息だ。（山盛）

●ご寄付と会費のご報告● (2021年1月15日～3月20日)

＜内訳＞			＜今年度の累計＞
ミルクキャンペーン	6名	9,000円	500,000円
福島支援	10名	50,000円	245,500円
チェルノブイリ支援	3名	3,000円	72,500円
使途指定なし	50名	347,500円	5,565,585円
賛助会員費	31名	93,000円	474,000円
正会員費	7名	24,000円	171,000円

ご協力いただきありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。（兼松）

編集後記

☆財布の新調のため財布売り場へ行くと、お札の入らない財布が幅を利かせている。お札を持たずにカード決済のみの人が増えていそうらしい。数少ない折財布をGETしました。（佳）

☆福一原発2号機で20～40ペタベクレル（ペタは1,000兆倍）、3号機で30ペタベクレルのCs137が測定された。1時間も被曝すると死に至る。じゃあ廃炉作業は誰がするの？「極めて深刻」とか言うてるけど、廃炉行程が先送りじゃない！後世に残す、負の遺産だね。（美）

☆子どもの頃、春の風物詩といえば、モンシロチョウが舞い、見渡す限り黄色に輝く菜の花畑でした。しかし、1971年にナタネの輸入が自由化され、外国産のナタネ油（特にカナダ産の安いキャノーラ油）が大量に輸入されるようになると、国産ナタネの生産量は激減し、次第に黄色い畑は姿を消していきました。近年の統計では、ナタネの自給率は0.1%以下、ほぼすべてが輸入のGM（遺伝子組換え）ナタネによって賄われています。また、日本において「有機食品が農産物の売上高に占める割合」はわずか1.5%であり、有機農地の占有率はわずか0.2%（世界第109位）であるというデータもあります。面白い例え話をひとつ。ある時、靴のセールスマンが、全員裸足で生活をしている村に行きました。その様子を見て、「靴を履く習慣がないから需要は0%、絶対に売れない」と言って諦めるのか、それとも「誰も履いていないから需要は100%、絶対に売れる」と言って勇気百倍となるのか、それが拡販の分岐点になるというのです。現在、日本のナタネの消費量は、年間約200万トン。国産ナタネの生産量は、年間わずか2,000トン（0.1%）です。品質に自信を持って「油菜ちゃん」を拡販すれば、市場は無限に広がっているということができます。（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エーブリント」

TEL・FAX (052) 871-9473